

ドイツの街中に溢れる芸術

西のぞみ

1.はじめに

私が今回のドイツ研修で調査研究の対象としたのは、芸術の分野についてです。私は大学で芸術の分野について学んでおり、美術部としても活動しているため、海外の美術などにとても興味を持っていました。今回のアウクスブルク市の研修の中で、沢山の施設などを見学しましたが、アウクスブルク市は、とてもたくさんの芸術的な建物などが街中に溢れていることに気が付き、とても興味深く感じました。よって本稿では、アウクスブルク市の街中にある建物などに注目して、アウクスブルク市の中にたくさん存在する芸術の要素について述べていきます。

2.アウクスブルク市庁舎

アウクスブルク市に到着してから普段住んでいる所とは全く違う街並みにも驚いていましたが、初めに衝撃を受けたのは、アウクスブルク市の市庁舎です。



アウクスブルク市庁舎

アウクスブルク市庁舎は1615年～1620年にかけてエリアス・ホルという人物によって建築された建物です。建物の中の黄金の間という場所は、名前の通り天井も壁も扉の装飾も全部黄金というとても豪華で美しい空間で、天井の絵には建築された17世紀ごろの女性像が描かれています。



黄金の間の天井

現在は実際に事務所として使われていないのですが、このような豪華な場所で仕事が行われていたということを想像するととても贅沢だなと感じました。ドア一枚であっ

ても、とても細かな装飾が施されているこの建物ですが、一度第二次世界大戦の時期に天井が抜け落ちたという過去があります。しかし、新しく市庁舎を立て直す、ということはずに、幸いにも残っていた設計図と写真を元に、残っていた当時の素材を使って再建されています。このように全く新しく壊れたものを作りなおすのではなく、元の状態になるべく近づくように再建するということは、芸術の観点や、また芸術の観点からもとても大切なことであると考えました。

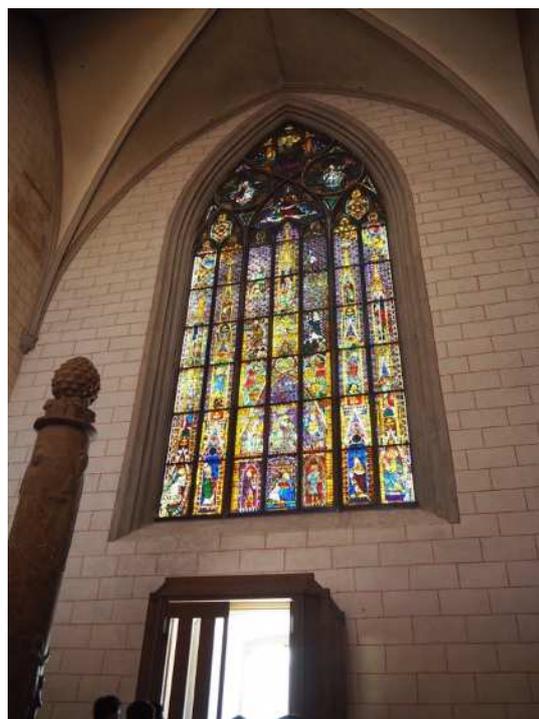
3. 大聖堂

市庁舎の次に訪れた大聖堂は、アウクスブルク市の中でもとても大きな建物のうちの一つです。元々はロマネスク様式で建てられたものですが、後に使える素材をそのまま使いゴシック様式に改築された建物です。外観や建物の地上の部分はゴシック様式で改築されたものですが、地下の部分のみロマネスク様式のままで残されています。大聖堂の入り口の大きな扉の上部には何人もの人の彫刻が彫られており、とても手をかけて作られたものであるということがうかがえます。



大聖堂の入り口

また、聖堂内にいくつもあるステンドグラスの配色は、アウクスブルク調と呼ばれる配色になっています。



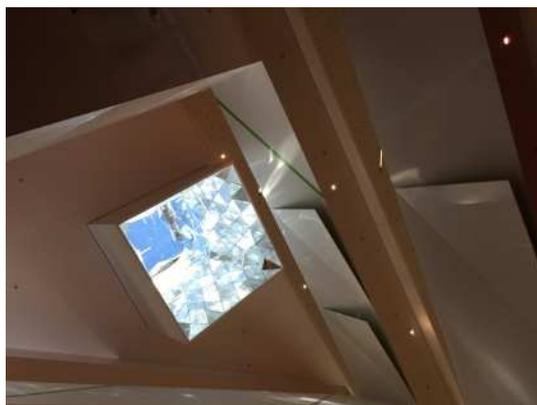
アウクスブルク調のステンドグラス

また、上の写真の左上にも写っているように、アウクスブルク市のマークにも使われている松ぼっくりのモチーフがこの建物が建てられた時代から使われていたことが

分かります。

4. アウクスブルク市立図書館

多くの市民が利用する市立図書館にも芸術的な要素をいくつか見出すことが出来ます。尼崎の図書館と比べてみると、特徴的なのは取り扱っている物です。図書館なのでもちろん絵本や小説などの本も扱っているのですが、本以外にも楽譜や楽曲のCD、また、日本のマンガやゲーム、色々なボードゲーム等、様々なジャンルのものを取り扱っています。また音楽のジャンルに力を入れているのか、ピアノを練習するためのピアノ室も図書館内に併設されていました。また、階段の手すりには点字が打たれています。この点字は、本は視覚障害の人でも点字を使うことで読むことが可能なのだという願いから付けられたものです。建物の外にはガラスと金属でできた柱が設置されており、その柱についているボタンを押すと、インターネットの辞書のサイト、ウィキペディアから、項目が一つ消えるという仕組みになっています。例えば「A」であれば、「A」から始まる単語のページがすべて消えてしまうそうです。情報を消すべきか消さないべきなのか、を人に考えさせるためのものとなっています。先述した手すりの点字と、ガラスと金属の柱は、どちらも何かのメッセージを来館者に感じてもらうための展示物であるとも考えられるため、ある種の芸術ではないのだろうかと考えました。また図書館の天井の方では自然光を取り入れるための多面体のような採光があり、実用的でもあり芸術的な面も併せ持っています。



図書館の天井の採光

5. プッペンキステ

アウクスブルク市にはプッペンキステという有名な人形劇場があり、尼崎のショッピングモール「つかしん」でも一度公演が行われています。人形劇、というと子供向けのものというイメージがとて強いですが、大人向けに今年一年の出来事を風刺的にまとめた「カバレット」という劇や星の王子様などの演目を夕方に行っているため大人でも十分に楽しめます。また、子供向けだからといって、人形やセットなどに力が入っていないことは全くなく、とても精巧な作りになっています。劇に使われる人形は少なくとも10本、一番多いムカデの人形では60本もの糸を使い、何人もの人で動かしています。また、人形を動かす団員になるまでも、6年程度かかります。人形自体にもとてもこだわりがあり、製作に使われる菩提樹の木は10年乾燥させたものを使います。また、目にもこだわりがあり、ただ眼の色を塗るだけではなく、靴に使われる釘を目に使うことで、光の反射で目に輝きを持たせるという工夫がされています。また、想像上の人物はグラスアイを使うな

ど、細部にまでこだわっていることがよくわかります。背景もきちんと家具やお城、ジャングルの木や、海などドラマのようなきちんとしたセットが組まれている点にはとても驚きました。



細かに作りこまれた人形や背景

これまで沢山の作品が上演されてきたプペンキステですが、過去にはミヒャエル・エンデ原作の「ジム・ロック」など、テレビで放送された作品もいくつかあります。よって、プペンキステは子供から大人まで親しみやすい芸術のひとつであると考えました。

6. 街中の小さな芸術

これまでは、町の中にある建物の中の芸術を紹介しましたが、建物の中に入らずに街並みを見るだけでも小さな芸術がたくさん存在します。たとえば、お店の看板などです。日本の一般的な店舗に設置されている長方形の看板やのれんにもおしゃれなものがありますが、基本的にはシンプルに店の名前だけを描いたものが多い印象を受けます。アウクスブルク市内で見つけた看板はこまかなつる草などの装飾があしらわれたものが多く、印象的でした。



馬のシルエットの看板



つる草模様の看板

また、町の要所に大きな彫刻や像などもあり、中々日本では見ない風景であり、町と芸術がともに共存しているという考えを持ちました



建物の屋根に造られた像

7.まとめ

以上より、アウクスブルク市の中には沢山の芸術に関連する施設や芸術的な建物が存在することがわかりました。また、建物だけではなく、街中の身近なところにも、看板や噴水、彫刻など小さな芸術がたくさん存在するということから、この町では人と町と芸術とが共存している、身近に芸術を感じる事が出来るということが考えられました。